

核融合フォーラムの現状と将来への対応（調整委員会委員長 香山晃）

前座と言うことで、核融合フォーラムの全体像を説明する。フォーラムは核融合エネルギーの実現に向けた研究や技術開発の促進を支援することを目的に平成14年5月に設立された。情報交換や討議の場の提供、情報発信、国の施策への貢献と提言、人材育成など、重要な役割がある。構成は運営会議、調整委員会の下に四つの専門クラスターがある。

運営会議は、顧問からアドバイス戴きながら、有識者や専門家の幅広い方々により構成され運営される。調整委員会の委員には、本日、新しい委員として堀池先生（大阪大学）、室賀先生（核融合科学研究所）の就任が運営会議で承認された。炉工学クラスターを担当され、重要な役割を果たして戴く。

核融合フォーラムはスタート時点で219名であり、現在までに会員数は着実にのびている。3月現在で380名となっており、本日9名の入会申し込みがあった。年度内に400名に達する見込みである（注：平成18年5月現在の会員数は、412名）。構成状況としては、所属別には、大学や核融合科学研究所、原子力機構が多く、産業界からも56名が参加されている。クラスター別では、プラズマ物理と炉工学の専門クラスターがそれぞれ全体の約三分の一、社会と核融合クラスターがその半分で、核融合の早期実用化クラスターへの参加が最近急増している。結果として、各クラスターに上手く分散しており、とても良いバランスの構成だと思う。

会合の開催実績としては、全体会合が本日含め発足以来3回目である。今年度、運営会議を2回、調整委員会を3回開催している。専門クラスター活動の本格化に伴い、調整委員会の開催回数が増している。社会と核融合クラスターは明後日、社会と核融合の在り方に関するシンポジウム開催のための準備検討会を開く。プラズマ物理クラスターは、他の学会活動や核融合科学研究所の研究会ともジョイントして行っていて、多くの会合が国際トカマク物理活動（ITPA）に関する国内での議論の場として開催されている。炉工学クラスターは、最近三つにサブクラスター化され、テストブランケットに係わる国際活動（TBWG）、IFMIFユーザーズグループに関する国際活動、低放射化鋼などの意見交

換の場として開催されている。早期実用化クラスターは着実に活動進めながら、3月27日に第1回目となる核融合炉ロードマップ検討委員会を開催する予定である。

国内におけるITER計画の実施体制は先ほどの松田執行役の資料にあったとおりであるが、国内意見の集約については、現在どうあるべきかの議論が行われつつある。我々の認識としてはイメージ的には、極内機関と協力しながら、何らかの独立した組織として活動すべきではないか。暫定的に那珂研（当時）に事務局を置くが、将来的には独立して活動するというのが設立当時の核融合フォーラムに対する考えであったと思う。